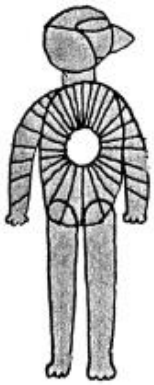
『くらしと保険』１９７１年（生命保険協会）

生 涯 教 育

心に栄養を与える制度と習慣をつくる

(財)能力開発工学センター所長　**矢 口　　新**

生活が人間を育てる



生涯教育などという言葉は最近のものであるが、人間一生が修業だということは昔から言われてきたことである。「七十にして心の欲するところに従って矩をこえず」というのは孔子晩年の述懐であるが、一生道を求めてようやく達し得た境地をのべたものであろう。古来どんな道でも功を遂げた人は一生涯その道について修業をつづけている。生きるということはそういうことなのではないだろうか。いつの時代に、功を遂げ名をなした人で、子どものころしか勉強しなかったなどという人がおろうか。本来人間は一生勉強すべきものなのである。特に現代がそうなのではない。

生涯教育などということがことさら新しいもののように取扱われるのはこの意味では、現代人のものの考え方が間違っているのである。第一に、勉強というのは学校だけでするもので、学校を卒業すると猛勉強はしないものだと考えるこれがおかしいことである。人間として、ほんとうに仕事をし、生活や仕事に本当にみがきがかかって来るのは学校を出てからであって、学校時代の勉強はカーテン越しの勉強でしかなかったことは誰しもが実感をもっている。仕事についてからは生活そのものが勉強になっている。それを勉強になっていないと考える人がいたら、それは目をくらまされているのである。

永年仕事に打ち込んだ人で何とも言えない味のある人によく会う。そこには学校などで到底与えられない修練が積まれているのである。そういうのを勉強と考えないとしたら、それは現代人の勉強という考え方がちがっているのである。確かにそういう点で、現代の教育という言葉は物事の正しい姿をとらえていない。これも学校の教育が生み出した誤った観念であろう。学校で教師と教科書で教えられる口先の教育、それを受けることが勉強をすることであって、仕事をして、その中で人間をつくって行くことは勉強ではないというような間違った観念をもってしまった。学校教育の出現は、学校という場所ですることが勉強の内容に関しても、ただ教科書によって知識を得ることばかりが勉強であって、仕事によって、生きて働く知識や心構えや根性を身につけて行くことを勉強と考えない誤った考えを植えつけてしまった。人生至る所に修業の場があるのである。また真に人生を充実して生きるためには、至る所で修練をする心がまえでなければならないのである。つまり生涯を教育の場としなくてはならないのである。

改められねばならぬ制度と観念

しかし近代百年の日本の教育の姿をみると、それとは反対の方向に社会の制度が作られて来た。それは国の制度はそうであったとい

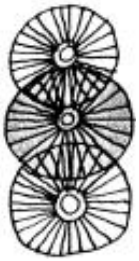
うことばかりではない。むしろすべての人々がそう考えたから国の制度もそうなった、社会の制度もそうなったというべきであろう。

たとえば現代は学歴主義の社会だといわれる。それを打破しようという動きもぼつぼつあらわれているが、考えてみると若いころ中学校か高等学校か大学かの卒業ということが、その後三十年も四十年もついて廻っているということはまったく奇妙なことである。そのような制度の根底には人間というものに対する無理解がある。非人間的な思想である。しかし過去百年というものはたいていの人がそれを是認して来たし、それを不可解だと思っても打破する努力まではしなかったのである。それだけ学校の教育が重要視されたのであるが、それはまた歴史的な理由もある。百年前、後進国として出発して、何が何でも知識を受けいれることが急務であって、そこに学校が大きな役割を果したので、学校の重みがそれだけ加わったのである。

このような日本の社会と学校との関係は、日本人の教育についての考え方に誤ったものを与えるという結果をもたらした。これもまた一種の宿命とも言うべきものであろう。本来学校というのは、生活の中での修練の場合のように具体的な体験的教育という点では、どうしても劣るのである。いわばカーテン越しの教育である。学校を出て社会人という言葉が使われるように、学校は社会の生活に入る前の教育でしかない。それは本来準備的な性格をもっており、真似事の域を出ない。できるだけ実際的にしようとする努力をしても、なかなか実際的にならないのである。

ところがわが国ではその生活前の主として観念的な教育が教育の本道であるかの如き錯覚をもってしまった。生活の中でおこなわれる教育、生活内教育の意義は失われてしまった。そしてそれは、同時に学校の教育が人間の教育の本道からはずれて、生命を失うもとにもなっているのである。現実の中で生きて心をなやまして行く中に人間が育つことを忘れて、ただいわゆる知識と称する口先のことを学ぶのが勉強と考えるに至っている。こうして学校教育の堕落がはじまってきた。たとえば教科書の内容をみると、百科事典の抜き書きのようにあれもこれもうわっつらの知識が羅列されている。人間をつくることは忘れられてしまった。

よりよく生きるために



現在教育は根本的に転換を必要とする段階になった。それを明白に意識させる役割を果しているのが最近の社会の問題である。一言で言えば現在の社会がもろもろの点で発展して、人間に一生の修業を要請しているということである。産業の世界で技術革新といわれることが起こって、それによって産業界で働くすべての人間が、その渦の中で対応しなければならなくなった。従来のように一部少数の人が能力をもっていて、あとは程度の低いピースワークをやっておればよいという状態ではなくなった。昔なら学校さえ出ておればなまけ者でもよかったが、今はそれではもう使いものにならないのである。

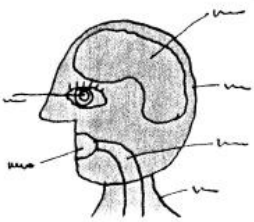
こういうことは何も産業の中のことばかりではない。最近消費者運動というのが目立って来たが、消費者も絶えず知恵をみがいて、いかに消費するかを工夫して行かなくては生活ができなくなってきているのである。何十年前に学校で教えられたことをうろおぼえにしているというようなことでは、とてもやって行けないのである。

最近公害問題がやかましいけれども、これも民衆自体が自らの環境を自ら守るという態度がなくては究極的には解決しないのである。そしてそれには公害に対する科学的センスをとぎすます不断の勉強がいる。誰かが守ってくれるなどという考え方では、あわれな廃失者になるか、生きては行けなくなるのである

こうして人間一生が勉強の連続

であるという時代になってきている。昔はのん気でよかったなどという人がおるかも知れないが、昔でもそうしてたえず修練した人によって人間社会は維持されてきたのである。今はみんなの力によって維持される社会、民主社会になったから、みんなが世の中を憂い、みんなで楽しむ社会にしなくてはならぬ。みんながそのために生涯勉強する努力をするのである。

生涯教育というのは、こうした反省と自覚が生み出した結果であるが、さてそういう考え方も制度も、現代の日本には何一つできていない。これから何十年かかってすべての人が生涯を充実して前向きに勉強するような制度と習慣をつくらなければならぬ。人間の頭と心とを絶えず養って栄養を与えることができるような体制を作る必要が起こっている。



われわれはパンのみ生きるにあらずということを知ってはいるが、心と頭を養うための努力は個人的にも社会的にも極めて貧困なのである。これから二十世紀の終わりごろには、エンゲル係数と同じ程度の教育費係数が常識になろうし、社会的な生涯教育制度も今の何十倍かに充実するであろう。否われわれの力でそうしなければ没落するであろう。